

いも類振興情報100号までの軌跡

いも類振興会 元専務理事 秋元 喜弘

「いも類振興情報（以下情報誌）」は、1984（昭和59）年7月に創刊されて以来、年4回の発行を続け、本年7月に第100号が発行される運びとなった。この編集刊行の一部に携わった者として感慨に堪えない。いも類（さつまいも、じゃがいも）に関わるわが国唯一の広報誌として今後とも継続して発行され、広く活用されることを期待してやまない。

唯一のいも関係広報誌

昭和59年、（財）諸類会館が（財）いも類振興会（以下振興会）に改組した際に、当時の理事長生天目健蔵氏の発案で、事業の一つとして情報誌を発行することとなった。生天目氏はいわゆる“いも”の専門家ではないが、深い見識を持ち、数々の著書もあり、印刷物の編集に造詣が深く、技術専門家とは異なった角度からの視点で原稿の収集にあたり、本誌の骨格はこのときに整えられた。振興会は、普及広報の事業として他に各種のイベント等を実施し、世間での“いも”への関心を高めるのに寄与しているが、それに比べ情報誌の発行は華やかさこそないが、記録として残る事業を継続して行っているところに意義がある。

1991（平成3）年振興会の理事会・評議員会で秋元喜弘が専務理事として選出さ

れ、情報誌の編集を受け継ぐこととなったが、生天目氏が築いた基本構想をなるべく変えることなく続けることにした。したがってその内容・体裁等はやや古めかしい感は否めなかったが、振興会の設立目的と力量にふさわしく、地味ななかにも出来る限り内容を豊に、変化のあるように心がけ、第94号までを担当した。

内容の吟味と原稿の収集

情報誌の発行は、いも類の生産振興・消費拡大に資するため、世間一般の“いも”に対する認識を高めるのが目的であるから、内容もそれにふさわしくなければならない。そのためには特定の分野・項目に偏ることなく、過去から現在に至るやや学術的なもの、実用的なもの、産地・消費地の実情などにつき紹介し、そのうえ出来る限り生産と消費のバランスがとれるよう、また誰もが肩がこらずに読めるような平易な表現とすることを心がけ、それぞれの部門の方から原稿の提出をお願いした。

しかし、調和のとれた稿を収集するのはたいへん難しい。第一に、いも類は日本にとっても世界的にみても、重要な作物・食糧であるにもかかわらず、これに携わる人の層が薄い。ということは原稿を依頼できる対象の人が絶対的に少ないということで

ある。変化に富んだ内容にする点からは、なるべく多くの人から提出してもらうのが望ましいのは勿論であるが、すべての人が快諾してくれるとは限らない。理路整然と貴重な意見を口頭で述べる人は決して少なくはないが、ではそれを原稿に、と依頼しても辞退されてしまうことも間々あり、弁舌と執筆とは必ずしもイコールでない、と思知られることもしばしばであった。このようなわけで、どうしても一部の方に再三寄稿をお願いするようになったのである。

次に、編集者の私を含めて、いもに関係した人が年を追うごとに高齢化し、減少していったことである。戦後の昭和20年・30年代にはいも類の増産は焦眉の急であり、研究・実務に携わる人の数も多く、研究実績も多彩で、たとえば北海道の学会はまるで「じゃがいもの学会」の様相を呈していた。それが1965（昭和40）年前後の経済成長に伴う選択的拡大で、果物・野菜・畜産物の生産消費が増大する一方で、いも類のそれは低迷し、いも産業に関係する人も次第に少なくなった。私が編集を担当した頃には、以前に数々の業績を残された方々も高齢となり、その貴重な体験と、それに基づいた意見等を情報誌上に留めることも難しくなった。

さらに、消費に関する記事を書けるにあたっては、日々直接消費に携わっている人、つまりレストラン経営者、給食事業に携わっている人、家庭の主婦、等に寄稿を願うのが望ましいのであるが、これらの人々は、いもの利用・調理には卓越した腕をもっている、それを紙面に表現するとなると二の足を踏み、結果的には活き活きとした

消費の記事を書けることは、あまり出来なかった。これは自らの力不足で、今でも悔いの残ることであるが、情報誌に消費の記事が少ないのは主としてこのような事情による。

原稿の収集には多くの苦労があったが、かつて職場を共にした方、“いも”を通して交誼をいただいた方、自ら稿を起すことはなくても、情報誌に理解を示すであろう向きを紹介してくれた方、さらに小さな組織で知名度も決して高くはない振興会の業務をよく理解したうえ、快く原稿を提出していただいた多くの面識のない方、そのうえ日本のいも事情に関心を寄せる外国の方、等から数々の貴重な原稿の提出・情報の提供をいただいたお陰で第29号から94号まで情報誌の編集が続けられたのは、ほんとうに幸せであり、有り難いことである。

ただ、これら各方面から寄せられた温かい理解、励ましと、振興会に対する期待に果たして十分に応えられるような誌面となったか、については決して自信があり満足しているわけではない。発行されたあと、ああすればよかった、あれでよかったのだろうか、と反省することしきりであるが、情報誌には日本の“いも”の歩んだ歴史、現状、また将来展望等についての貴重な資料が蓄積されていることは間違いなく、これらの情報が適切に活用されれば、編集に携わった者として身に余る光栄である。

配布先の検討

情報誌は主としていもに関わる行政・研究・普及機関等を中心として配布してきた。なお消費者へのPRの視点から、以前に飲食業の団体、学校とくに農業・家政関係の

高校等に配布を試みたこともあったが、内容・配布の方法等が当を得ていなかったためか、反応は必ずしも予想どおりとはゆかず、継続して発送することを中止した。

小学生に対する教材の一つとして情報誌が活用できないか、とはまことにおこがましいことではあるが、かなり以前に考えたことがある。もちろん児童自身が閲読するだけでなく、教師用として、である。しかしあまりにも対象が広汎であるのと、教材の補助として用いてもらうには内容をいま一つ吟味しなければならず、断念した経緯がある。

幼児期の体験は成長してからも活かされることが多い。いも植え・いも掘りを児童に体験させる幼稚園・小学校は多く、私も幾度か見学させてもらったが、そのときの子供たちは活き活きと嬉しそうに行動し、とくにいも掘りと、そのあとの試食のときはそうである。

高級食材の“いも”ではなく、野性味あふれた素朴な味は、きっといつまでも忘れることなく、ひいては“いも”に対して良いイメージをもったまま成長し、生涯つくくであろうことが期待されよう。巷でみられる、児童向けに解説された絵本とはまた違った見方で、より平易な情報誌をつくって見たら、と考えたこともあったが果たせず、これも心残りの一つとなっている。

変わりゆくいも事情

いも関係の仕事を長年続けてきた私であるが、情報誌の編集に携わってみると、自分が知っていることはほんの一部であり、未知の分野がいかに多いか、に驚き、自らの勉強不足を恥じた次第である。

いも類の普及に人知れず命がけの苦勞をした人たちが大勢いたこと、地方色豊かな加工品がつくられていること、先祖代々汗を流して造成した畑でいもがつくられていること、地域の振興にいもが大きな役割を果たしていること、ワクチンなど医薬品の開発に役だっていること、等々、いもに関する話題は尽きることはない。

情報収集のために産地・史跡などを訪ねることもあったが、応対してくれた方々は多忙ななかにもかかわらず、みな快く応じ、懇切丁寧に案内説明してくれたことも喜びであった。いも関係の人たちは、どこで会っても明るく、親しみを覚え、いわゆる”いも仲間”といった感じである。これは日本だけに限らず、全世界的な傾向なのかもしれない。そして皆一様に、いもは重要な作物・食糧ではあるが、これほど問題の多いものもない。長年いもを扱ってきたが問題のない年はただの1年もなかった、との言葉は印象的であった。

国民の保健上重要な食物といわれるいも類であるが、日本での消費、それに生産ともにならずしも上向きになっていないのは気がかりである。これは、いもの真価が十分認識されていないからか、あるいは承知はされていても、ほかに溢れるほどの美味があるため、いも類が割り込む余地がないからか、一部の戦中派の人は不味いいもを食べさせられたので、拒否感をもっているからか、いずれにしても難しい問題であるが、いかにして消費を伸ばすかは今後いも産業界における検討課題の最たるものであろう。

世界のいも類生産地図も塗り替えられつつある。人口の急速な増加の影響もあろう

が、中国・インドでのじゃがいも生産の伸びは著るしく、他の開発途上数カ国もこれに続く勢いであり、それに反して、かつてじゃがいも大国であったドイツをはじめ欧州の各国・米国では、生産・消費ともに減少か低迷の状況である。

世界的に食糧その他原料としての、いもの価値がどうみられているかであるが、いも類は決して貧者の食物ではなく、広く全人類の暮らしを支える健康食品であり、とくに消費面での価値の再認識とともに、画期的な用途の開発と、それに対応する生産体制の確立が切に望まれ、そして日本に積み重ねられた技術・情報が、今後開発途上の国々での、いも類の生産振興・消費拡大、ひいては民生の安定のために活用されることが期待される。

謝 辞

情報誌の作成・発行に際しては、原稿・情報を提供して下さいました方以外からも数々の御好意をいただいた。

印刷はJTB印刷（株）（旧交通印刷）にお願いしたが、不慣れな私は必要以上に負担をかけたに違はなく、申し訳ない限りである。それにもかかわらず、いつも快く引き受け、ときには適切に助言してくれるなど、親身に支えていただいた。

情報誌の編集業務すべてを私に託された振興会元理事長生天目健蔵氏、前理事長倉地英雄氏、前副理事長安永吉郎氏には終始温かいご指導と細やかな配慮をいただいた。また、常に温かい心配りで支えて下さった元監事安田英司氏、元職員池城節子・川又章両氏にはたいへんお世話になった。

第29号から94号までの長期間にわたり編集・発行を続けられたのは、ひとえにこの方々のお陰であり、誠に有り難く、厚く御礼申し上げる次第である。